

氏 名 森 真由美
学位の種類 博士（文学）
学位記番号 甲 第66号
学位授与の日付 2018年9月15日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項 該当
学位論文題目 **落語を利用した日本語教育の研究**

学位審査委員 主査 教授 藤原雅憲
副査 准教授 中川美和
副査 教授 楚輪松人

論文内容の要旨

本論は「落語を利用した日本語教育の研究」をテーマとする。

外国語教育の分野において、言語教育に加え文化教育の重要性が叫ばれるようになって久しい。日本語教育においても同様に、文化教育を含めた総合的な日本語教育を目標にした実践活動が増えている。さらに、昨今では、インターネットなどの通信技術が急速に進歩するとともに、世の中がグローバルな人材を求めるようになったことで、日本語教育においてもグローバルな人材の育成が教育目標の一つとして掲げられるようになってきている。グローバルな人材には言語能力だけでなくコミュニケーション能力が必須であり、これらの能力促進のためにも文化教育の果たす役割はますます重要になってきている。

ここで筆者が目指すものは、大学などの高等教育機関に在籍する日本語学習者を対象にして、限りある授業時間内での言語習得およびそれに有機的に関連した文化習得を促進する教室活動である。そのために、日本伝統文化の一つであり、また話芸という特徴を持つ落語に注目し、それを主教材として利用することで、言語および文化の二側面を効率よく導入する実践教育方法が構築できるのではないかと考えた。しかし、私見では、日本語教育の主教材として落語を利用した先行研究や実践活動はまだそれほど多くない。そこで、本研究では、日本語教育において、落語作品の利用の有効性について述べ、落語を利用した授業実践のプロセスの記述と分析をし、「落語で学ぶ」コース・デザインの一提案を行うことを目的とする。

本論は序章、1～5章、終章で成る。序章では本研究の目的を述べ（上述）、終章では本研究の意義と今後の課題を述べる。以下で、1～5章の概要を述べる。

第1章では、日本語教育学会誌『日本語教育』（1962年創刊号～2016年170号）を主な調査対象として、そこで報告された「生の素材（落語を含む）」を利用した実践活動の変遷を年代別およびジャンル別に概観し、今後の動向を分析する。そして、落語を教材として

利用した実践活動の位置づけを確認する。考察の結果、落語を利用した日本語授業は言語と文化の総合的な教育を実現できるだけでなく、授業の一環として口演活動を取り入れることで今後主流となっていくであろうアクティブ・ラーニング型教育の実現にも大いに有効であることを述べる。

第2章では、「落語作品の言語的分析1」として、落語スクリプトに出現する文型・文法を分析し、落語スクリプトの主教材としての有効性について考察する。ここで分析対象とした落語スクリプトは実践活動で利用しやすいと考え選択したものである。そのスクリプトから日本語教育の学習項目と判断した文型・文法を取り出し、それらをレベル別に分類し、その傾向を分析する。考察の結果、話し言葉で構成される落語スクリプトは日本語教育に必要な文型・文法が中級レベルを中心に使われていることが分かり、これまでの「落語教材といえば上級」というイメージを塗り替え、中級レベルの日本語教育にも有効であることを述べる。

第3章では、「落語作品の言語的分析2」として、江戸落語に頻出する「というと・てえと（「というと」の音変化したもので東京方言によく見られる形）」を取り上げ、談話機能論的に分析する。「というと」表現は日本語の特徴的な表現法の一つといわれ、日本語教育の学習項目でもある。特に江戸落語において「というと」表現は頻出する傾向にある。そこで、江戸落語音声資料から「というと」を取り出し、それらを文型構造とその用法別、意味別に分類し、江戸落語に見られる「というと」の出現状況を提示する。次に、「というと」を構成する格助詞「と」、発話動詞「いう」、接続助詞「と」が持つ機能について、それぞれの先行研究を概観する。そして、先行研究を参考にして、落語に見られる「というと」が使用される言語構造を談話機能論的に分析する。考察の結果、落語に見られる「というと」表現は「場面の二重構造」、「笑いの構造」、「前景化・背景化の二重構造」を持っていることを述べる。

第4章では、落語教材の有効性を考えるにあたり、「文化的側面の文献研究」として、落語の持つ最大の特徴である笑いに注目した実践活動を試み、学習者がその笑いをどのように理解するかを観察し、その効果を検証する。まず、笑いに関する先行研究を概観し、日本語授業で取り入れることのできる笑いについて選択の条件を提示する。次に、中級学習者を対象に先の選択条件に適った落語DVDを利用した実践活動を試み、学習者が落語の笑いを理解できるかどうかを観察する。考察の結果、日本語学習者は落語の笑いを理解できること、また、落語を教材として利用することは教室活動の雰囲気作りに役立ち、学習効果の向上に貢献することを述べる。

第5章では、1章～4章の考察を踏まえて、中級レベルの日本語学習者を対象に落語を主教材とした言語的および文化的な二側面を効率よく導入する「落語で学ぶ」コース・デザインを作成・実践し、その効果を検証する。本コースは、読解・視聴解・文法学習などの従来の知識伝達型と小断口演活動を取り入れた学習者参加型の2つの授業形態を連動させて実施した。ここでは、まず、教室活動の概要として活動目標や活動内容・手順などを

時系列で具体的に提示し、フィードバックを報告する。さらに、本コースを日本語学習、日本文化理解および日本文化教育、協働学習の3つの観点から考察する。考察の結果、本コースは「言語・文化合体型」と「知識伝達・学習者参加型」を併せ持ち、総合的かつ活動的な実践教育方法として有効であることを述べる。

審査結果の要旨

本研究は、日本語教育の教室活動に落語を用いることの可能性を検証し、その有効性を証明したものである。

戦後の日本語教育は、H. パーマーのオーラル・メソッドを継承した長沼直兄の仕事に始まり、オーディオリンガル・メソッドを経て、コミュニカティブ・アプローチに至っている。この間、主教材としての日本語教科書に重心を置いた教室活動が続けられてきたが、実際のコミュニケーション場面との乖離は避けられることはできない。そこで、一般の人々が愛好する作品、つまり小説やエッセー、新聞や雑誌の記事、ドラマやアニメなどを取り入れて、できるだけ現実に近い活動を行おうという試みがなされてきた。その多くが、課題を残しながらもコミュニケーション力の養成に役立ったことを報告している。しかしながら、日本の伝統文化の一つである落語を利用しようという動きは、2名の研究者を除けば皆無といった状況であった。その2名の試みも実践報告に過ぎない。本格的な研究はまさしく本研究をもって嚆矢とするものである。その意味で野心的な研究であると言えるだろう。

本博士論文は、研究の目的と構成を述べた序章に続き、第1章で、学会誌『日本語教育』創刊号～170号を調査し、日本語教科書以外の作品を利用した実践活動の変遷を詳述している。1980年代～1990年代は読解を中心とした活動が目立つが、21世紀に入ってからは能動的な活動に移行してきていると述べている。落語を取り入れたものは、2010年以降にわずかに2例現れただけであると指摘している。

第2章では、落語という話芸作品が上級日本語レベルにある学習者向けであるという従来からの俗説に挑戦している。分析の対象として取り上げた作品は、「寿限無」と「時そば」、「饅頭こわい」である。それらを文型・文法の観点から分析し、その項目が日本語レベルのどの段階にあるかを評定している。その結果、「寿限無」では上級項目が8%、「時そば」では14%、「饅頭こわい」では10%であることを明らかにし、「これら3つの落語スクリプトは、中級レベルの学習者が既習の初級レベルの復習を兼ねながら、中級レベルの文型・文法を無理なく学習できるテキストとして有効である」(p.41.)と結論づけている。

第3章では、落語に頻出する「というと」という表現を考察している。「菓子屋の手前に来て、この店にはまんじゅうがあるナ……というてエと、目をつぶってパーッと駆け出さなくっちゃ、そこんこ通れねんだよ」(「饅頭こわい」、『志ん生滑稽ばなし』、p.38、立風書房、1993年)の下線部分は「～という」との縮約形である。落語を愛好した物理学者・朝永振一郎氏も講演の中で多用している表現である。この表現について本論文では、落語の音声資料から44カ所の「というと」と187カ所の「(という)と」を取り上げ、先行研究を踏まえて分析している。その結果、「というと」の使用が作品中の出来事に臨場感を与えていること、「PというQ」という話線の方向が笑いを導く構造になっていることを明らかにしている。

第4章では、笑いに焦点を当てている。笑いに関する古典的名著である、H. ベルグソンの『笑い』を引用し、そこで述べられているモリエールの喜劇の笑いと言語を比較して、笑いは、(1)「質問文+質問内容にかみあわない答え」の繰り返し、(2)「質問文+予想内 or 予想外の答え」の繰り返し、(3)フレーズの繰り返し、から生じているとし、この東西の笑いが共通しているかどうかを留学生対象の日本語クラスで検証することにした。はじめに「時そば」、次に「ちりとてちん」の視聴を行った。視聴中に留学生の笑いが生じた場面についてフォローアップ・インタビューを実施した。その結果、留学生は、「落語家のしぐさや音声に加えて、話の内容を理解して会話のやりとりをおかしがる」(p.97.) ことが観察されたこと、また、同一の文が要素を代えて繰り返されたことが留学生の笑いを誘ったことから、落語を主教材とした授業では、「学習者が日本文化のひとつである落語の笑いを理解しながら、それを日本語および日本文化の習得に活かすことができる」と締めくくっており、東西の笑いに共通の基盤があることを明らかにしている。

第5章は「落語を学ぶ」ではなく、「落語で学ぶ」というタイトルを冠した、落語を実践することの有効性を論じた内容である。まず、落語を学ぶ。ここでは、スクリプトの読解、DVDの視聴、文型学習を行った。これは知識伝達型の授業である。次に小唄活動を取り入れた学習者参加型の授業を行った。これが「落語で学ぶ」ということである。高座に座ったつもりで小唄を演じることを目的としている。これは落語家になりきるということである。このことを著者は学習者の「肯定的変化」と捉え、「主観的な自分→客観的な自分→主体的な自分」と変化する認識活動を通して、学習項目に対する外面的かつ内面的な理解を深め、さらに次の段階へと学習を進めていくことができると結論づけている。

では、論文の審査基準に従って評価を述べることにする。

「先行研究」はAと評価した。各章ごとに先行研究を踏まえた上での論述が展開されていると判断したからである。

「論理性」については、第1章でのデータ収集に基づく考察、第2章でのスクリプト分析によるレベル判断の適切性、第3章での談話機能論からの新しい知見の提出、を重く見て、Aと評価した。

「独創性」はAと評価した。すでに述べたように、本研究は日本語教育の領域でのパイオニア的な研究であり、これ以後の、落語を利用した日本語教育研究の先駆的かつ不可欠な先行研究となることは間違いないとの判断に至ったからである。

「文章表現・書式体裁」に関して、参考資料と参考文献は本論文巻末に移したほうがいいのではないかと指摘があったが、各章ごとの結束性および各章ごとの参考文献の個別性に鑑みて現書式体裁のままよいと判断し、Aと評価した。

「倫理上の問題」は、引用等の研究倫理上の問題がないので、Aと評価した。

最後に総評を述べる。本研究はデータの緻密な分析と正確な授業観察に基づいた実証的な研究であり、論証を進める手続きの妥当性や、出された結論の適切性、着眼点の独創性を高く評価し、合格と結論づけた。